青年婦人部　平和行動 in 広島

日　時：2022 年 8 月 15 日 8 月 5 日（金）～8 月 6 日（土）
参加者：石川、遠藤（日新労働組合）
県　連：小室

～千羽鶴の献納～
各単組で作成した鶴を第 4 回幹事会の際に持ち寄り、千羽鶴の作成を行いました。
作成した千羽鶴を平和行動の一環として平和記念公園内「原爆の子の像」にある献納スペースへ届けてきました。

～平和記念資料館、原爆ドーム～
平和記念資料館では当時の状況や実際に被爆された方々のメッセージや被害の大きさがわかるような物が多く展示されていました。また、原爆ドームも実際に間近で見ると写真とは違った雰囲気があり、平和に対して考えさせられました。

～PEACE PARK TOUR VR～

被爆者の証言や過去の写真等をベースにした映像を、VR 技術を用いて再現し、被爆前の街並みから被爆後の変化、そして復興へ進んでいく様子を、平和公園内の要所を巡りながらガイドの方に案内して頂きました。

～参加幹事の感想～

石川

2022 年 8 月 5 日(金)・6 日(土)の 2 日間、広島での平和活動に参加しました。広島では、以下の 3 つの活動を行いました。

①平和記念公園へ千羽鶴の献納

②広島平和記念資料館での学習

③VR を用いた体験ツアー(PEACE PARK TOUR VR)

1 日目は①、②の活動をしました。神奈川県運輸労連青年婦人部で作成した千羽鶴を「原爆の子の像」へ献納しました。ここには全国の様々な団体から千羽鶴が献納されており、献納場所がないほどでした。ここに千羽鶴を献納するようになったのは、佐々木禎子さんという女性が始まりだそうです。禎子さんは 2 歳の時に被曝し、自宅が全壊するほどの被害を受けたのですが、彼女自身は無傷でした。その後もすくすくと育ち、元気で活発な少女に成長しました。しかし、被曝から 9 年後、小学 6 年生の時に白血病を患います。入院中に看護師から折り鶴を千羽折れば願いがかなうと聞いた禎子さんは鶴を降り続けますが、発症から 8 ヶ月後に亡くなってしまいます。この知らせを聞いた禎子さんの同級生は記念碑を建てたいと考え、各地から募金を募り原爆の子の像を建てたそうです。それ以来、ここには平和を願い千羽鶴が献納されるようになりました。

献納を終えた後に、広島平和記念資料館を訪れました。ここには原爆投下時の街の様子や、被爆者の言葉が展示されていました。当時の写真や絵はとても悲惨なもので目を覆いたくなりました。原爆で亡くなった方達の遺書があり、そこには家族への感謝の言葉や自分の怪我は治ると信じて疑わない言葉が書かれていました。ここでの体験は日本人として忘れてはいけないことだと思います。

2 日目は平和記念公園にて VR 体験ツアーを行いました。実際に公園内を歩き、原爆投下当日の様子を体験しました。原爆が投下された場所や投下直後の街の様子を VR で体験しました。この VR は被爆者の証言をもとに作られた映像で現実味があるものでした。また、ツアーに広島在住の男性がいらっしゃったのですが、広島では小学生くらいで平和学習がと止まってしまうことや、被爆者は体験をあまり語りたがらないため記憶の伝承が途絶えてしまっていることを話していました。

以上が、私たちが広島で行った平和活動です。原爆は過ちであり、2 度と繰り返してはいけなものです。現在も世界では戦争が起きていますが、他人事と思わずに平和の尊さを訴え続けることが大切だと思いました。

遠藤

8月5日・8月6日私たちは原爆の平和式典に千羽鶴を奉納するために広島を訪れました。

8月6日は今から77年前の1945年に広島に原子量爆弾が投下された日で、毎年その日に平和記念式典が開催されており、神奈川の運輸労連から千羽鶴を奉納しています。今年はその運輸労連の代表として日新が選ばれ、8月5日に小室、石川、遠藤の三人で実際に現地に訪れ千羽鶴を奉納してきました。しかしながら今年は、新型コロナウイルスの影響もあり、8月6日に行われる平和式典では人数制限が設けられ、残念ながら式典には出席することはできませんでしたが、代わりに広島平和記念資料館を見学してきました。

広島平和記念資料館では、被爆資料や遺品などが展示されており、世界の人々に核兵器の恐怖や非人道性を伝え、「ノーモア・ヒロシマ」と二度と広島で起きた惨劇を繰り返さないよう訴えかけています。実際に資料館を訪れたことにより、学生の時に学んだ広島の原爆投下の大まかな内容ではなく、なぜ広島に原爆が投下されたのか、原爆を使用するといい手段をとった原因など、当時の日本とアメリカの歴史的背景が具体的に知ることができ、とても勉強になりました。

また、自分が広島を訪れて感じたことの一つにとても栄えている街だなという印象がありました。しかし、あの大規模な爆発があり町全体が崩壊しかけていたにもかかわらず、どのように復興していったのかが疑問でしたが、それも資料館を訪れたことにより理解することができました。資料によると、戦争が終結して疎開した子ども、戦地の兵士、外地の市民が広島へと戻ってきましたが、衣食住に必要な物資の不足や原爆による傷病などにより人々の暮らしは非常に苦しいものでした。そんな中でも、広島の人々は道路や橋を復旧させ、廃虚にバラックを建て、屋根のない教室で勉強するなど生活再建のための地道で力強い努力を続けていきました。その結果、国内だけではなく海外からの支援もあり、広島の人々は自らの生活を再建させつつ町の復興へとつながっていきました。広島市の復興の道のりは困難なものでしたが、1949年制定の広島平和記念都市建設法に後押しされて都市基盤は徐々に整備され、現在は人口100万人超える都市にまで発展していきました。

このように莫大な被害があったにもかかわらず、広島の人々の力強い努力と粘り強さ、また、国内外からの支援のおかげで現在の広島の街へと復興していったことは、素晴らしいものであり、私たちもこのような姿勢は見習わなければいけないことだと実感いたしました。